

■ 苫小牧港港湾計画の輕易な変更 (西港区真古舞地区の専用埠頭計画の変更)

苫小牧港管理組合 施設部 計画課

はじめに

苫小牧港は昭和38年4月に「石炭の積出港」として開港して以来、古くから苫小牧市に立地していた製紙業や、港湾整備に伴い臨海部に進出した様々な企業の生産活動を支え、人口や都市規模の拡大など苫小牧市の発展に大きく貢献してきました。現在では、立地企業の原材料の搬入や製品の出荷、道民の暮らしに欠かせない物資の輸送を支える北海道の海の玄関口として大きな役割を担っています。

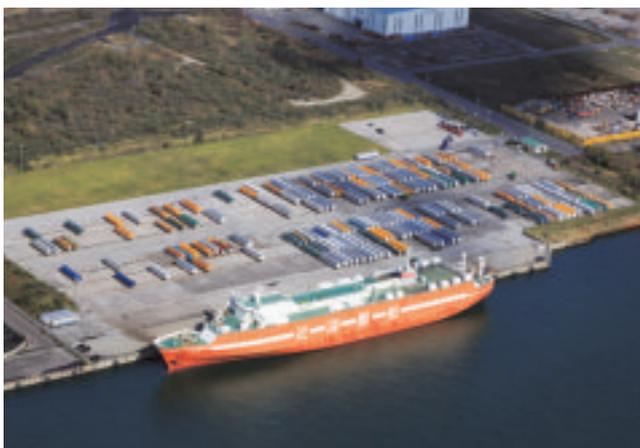
特に当港でのフェリー・RORO船は週100便を超える充実した航路を有し、北海道と本州とを結ぶ物流の大動脈を形成しています。内貿取扱貨物量は、平成13年から15年連続して全国1位となっており、内貿ユニットロード輸送における国内有数の拠点となるまでに成長を遂げています。

昨今、我が国では少子高齢化社会を迎え、労働力不足が深刻化しています。物流においては、トラックドライバー不足は大きな問題となっており、トラック輸送から鉄道や船舶への輸送の転換など、効率化の取組が行われています。

当港においても、就航するフェリーやRORO船のリースに合わせた大型化が図られており、輸送の効率化が進められています。

立地企業による輸送効率化の取組

苫小牧市に立地する製紙工場では、年間約100万トンの紙製品が生産されており、このうち、新聞用紙は日本国内シェアの約3割を占める世界最大規模の工場



写真：西港区真古舞地区の専用岸壁を利用するRORO船

となっています。

生産された「新聞用紙」や、その原料となる「古紙」の輸送には、主にフェリーやRORO船が利用されていますが、中でも取扱量が多い関東地区との輸送は、西港区真古舞地区に位置する専用岸壁からRORO船3隻によって週6便が運航されています。

この3隻のRORO船は、いずれも老朽化が進んでいることから、省力、省エネなど地球環境に配慮した新造船への入れ替えが予定されており、船体の大型化によりシャーシ貨物の積載台数を増加させ、輸送の効率化を図ることにしています。

苫小牧港港湾計画(輕易な変更)の概要

大型化した船舶の安全な係留には、現在の専用岸壁の能力では不十分であることから、岸壁を所有する企業では、新造RORO船の船型に対応した港湾施設の改修を計画しており、現港湾計画の専用埠頭計画及び水域施設計画の変更を行いました。

変更内容は、現状、水深11m、延長220mの岸壁を、水深は変更せずに岸壁を延長300mに延伸するとともに、延伸する岸壁前面の水域を新たな泊地として0.3ha拡張しています。



図：苫小牧港港湾計画図(平成29年12月)

おわりに

現在、当港ではRORO船の大型化により増大するシャーシ貨物の荷役効率を改善するため、西港区本港地区の公共岸壁において、老朽化に伴う岸壁改良と合わせた背後の荷さばき地の拡張や隣接地でのシャーシ

ヤードの整備などを進めています。

また、昨年度より港湾計画の改訂に向けて、概ね20～30年後の苫小牧港の目指す姿である「苫小牧港長期構想」の策定に着手しています。この中で、苫小牧港が担う役割の一つとして、我が国における内貿ユニットロード輸送の拠点を掲げ、そのための機能強化

としてRORO船ターミナルとしての埠頭再編なども検討していくことにしています。

引き続き、苫小牧港に期待される役割を果たしていけるよう、労働力不足への対応や食の輸出拡大など、新たな要請や課題についての検討を進め、港湾機能の強化の取組に繋げていきたいと考えています。

■ 「北方海域技術研究会 平成29年度 技術研究発表会」を開催しました

国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒冷沿岸域チーム、水産土木チーム

2018年2月2日に寒地土木研究所講堂において、「北方海域技術研究会 平成29年度 技術研究発表会」(主催：日本技術士会北海道本部北方海域技術研究委員会、寒地土木研究所)を開催しました。本研究発表会は、港湾・水産関係技術者の技術力向上をめざして、毎年開催しており、技術者同士の交流の場としても貴重な機会となっています。日本技術士会北海道本部と当研究所は2011年11月に「連携・協力協定」を締結しており、連携行事の一環でもあります。

寒地土木研究所寒冷沿岸域チームの木岡主任研究員は「海水のはなしと寒冷沿岸域チームでの研究概要」と題して、海水の形成・構造的性質等の基礎的な話の後、水産土木チームの梶原研究員は「衛星画像による海底被覆物マップを用いた漁場環境の評価手法について」と題して、衛星画像から藻場の繁茂状況を把握する手法について講演を行いました。

北海道水産林務部水産局漁港漁村課の井上真仁専門主任から「漁港内泊地をナマコ増養殖へ有効活用するための検討について」と題して、ナマコの生息環境の

確保を目的とした港内の海水交換シミュレーションなどの事例について講演されました。

また、日本データサービス株式会社水工第Ⅰ部の若森宣人課長は「リニューアルパネルを用いた港湾・漁港構造物の補修方法の紹介」と題して、リニューアルパネルの施工方法を紹介し、この有効性と今後の課題について解説いただきました。

各講演とも興味深い内容であり、会場では活発な質疑が交わされ、この発表会への関心の高さが感じられました。今回の研究発表会には北海道開発局、寒地土木研究所、民間企業等より約70名の参加がありました。主催者の一員として、ここに記して謝意を表する次第です。



写真-1 会場の様子



写真-2 井上真仁氏の講演



写真-3 若森宣人氏の講演